

左の文章をよく読んで、後の設問に答えなさい。

四〇年近く前の私の予備校生時代、一人の頑迷な理系の教師がいた。彼は、当時、最先端の情報工学が専門であった。この教師の口癖は、「もうあと数年もすれば、自動翻訳が飛躍的に進む。だから、君たちがいま必死に学んでいる英語はすべて無駄になる」というものだった。

この文章を読んでいてすべての読者がご承知のように、彼の予言は見事に外れた。しかし、この教師のことをいつたい誰が笑えるだろうか？ いまは逆に、小学校からの英語教育が実施に移され、二〇二〇年度には、これまで「外国語活動」とされてきたものが、小学校でも教科として扱われるようになる。しかし、この改革を批判、疑問視する声も多い。

私の親しい英語教師の中には、英語教育は現行の中学校どころか高校からでもかまわないと公言する方たちもいる。それよりは母語の言語運用能力をしっかりと高めてもらった方がいいと考える教員は多い。自らの語学教育の力量に自信のある方たちほど、英語の早期教育には（少なくとも義務教育化には）反対する傾向がある。

また幼児期の英語教育は、少なくともその後の英語の成績とは相関性がないというデータもある。もちろん私は「だからやめた方がいい」といった短絡的議論に与^{くみ}するわけでもない。

ネイティブスピーカーと同じ発音を目指すなら、百歩譲って早期教育は大切なものかもしれない。しかし、そもそも日本人の大多数が、ネイティブと同じ発音をする必要があるのかどうか。

さらに、教えるべきは英語なのかという議論も当然あるだろう。二一世紀の中盤以降を生きる日本人に必要なのは中国語かもしれないし、あるいはドイツ語やロシア語かもしれない。

また、近年の自動翻訳技術の進歩には目を見張るものがある。外国人の多い観光地では、土産物屋や旅館などの接客にはスマホのGoogle翻訳や、小型の自動翻訳機は欠かせないツールとなっている。おそらく、この技術は加速度的に進歩していくだろう。細かいニュアンスを伝えることができるようになるのはまだ先のことだろうが、接客に使われるパターン化された会話ならば、タイムラグなしで機械翻訳ができる日もそう遠くはない。先の予備校教師の主張は、五〇年ほどの時を経て実現するかもしれないのだ。

もしもそうなったときに本当に大事なものは、その自動翻訳の機械を使いこなしつつ、微妙なニュアンスをノンバーバル（表情や身振りなどの非言語領域）で伝えていくコミュニケーション能力かもしれない。

いやいや、もちろん、このまま英語が世界を席卷し、このような批判があったことすら笑い話のようになるかもしれない。

わからない。本当にわからない。

平田オリザ『22世紀を見る君たちへ』（講談社現代新書、二〇二〇年三月）

【設問】 現代社会では、グローバル化が進み外国語との距離がより一層縮まっていくことが予想される一方で、本

文が紹介しているように自動翻訳の技術が飛躍的に進展しているという事実もある。そうした状況の中で、私たちにとって外国語（英語に限らなくても良い）を学ぶことにはどのような意義があるだろうか。それについてあなたの考えを、具体的な事例に触れながら、六百字以上八百字以内で書きなさい。（句読点などの記号や空白も字数に数える）